

労働者家族における子どもの家事参加の実態と課題（第1報）  
 ○高知学園短大 西本恵子 高知大教育附養 舟橋久子  
 高知大教育 鈴木敏子

目的 現代家族の中で、子どもが家事に参加することが少なくなっている実態が指摘され、それが子どもの心身の発達を歪めている原因の一つとしてとらえられることも多く、子どもを家事労働に参加させることの意義が改めて問い直されている状況がある。そこで私たちは、子どもの家事参加を促すしつけの、しつけ領域での位置づけを明らかにし、そして家庭教育、親子関係の留意点を見出すために、これまで、一地方都市高知市における調査を通して、子どもの家事参加の実態と生活諸条件との関わりを考察してきた。さらに、現代日本社会で多数を形成する階級——労働者の家族の、子どもの家事参加をめぐるしつけにかかわる特徴と課題を引き出す必要を感じ、一地方工業都市を選定して、子どもの家事参加の実態とその背景を明らかにすることにした。

方法 1982年に新産業都市に指定され、重化学工業を発展させてきた愛媛県新居浜市の中心部にあるT小学校の5年生と6年生476名を対象にし、児童と母親にアンケート調査を依頼した。調査時期は1980年10月下旬。児童471票、母親465票を回収し、その内、児童票と母親票がともに有効な422票を分析した。

結果 ①父親の76%、母親の58%が雇用者で、核家族が85%を占めている。②子どもも母親も、90数%が、家庭内の主たる家事担当者は母親であると答え、他の家族全員が家事役割を決めて分担している家族は5%、全く決めてない家族が67%であった。③父親が家事をよくしているという母親は10%、子ども14%、「あまりしない」「全くしない」は母親57%、子ども47%であった。④家事労働の遂行が母親=妻に集中している実態がある。